

人も自然も共に生きる

ESD×生物多様性しんぶん

2011 年秋冬号

新潟県南魚沼市の天然なめこ photo: 宮部浩司

このニュースレターは、ESD-Jが取り組む「ESD×生物多様性」プロジェクトのプロセスや成果をお伝えするために発行しています。

ESD×生物多様性プロジェクト2011 人材育成モデル事業進捗レポート

「ESD×生物多様性」プロジェクトは今年、生物多様性を大切にしたい地域づくりを担う人材育成モデル事業を3地域で実施するとともに、『ESD×生物多様性 人材育成ハンドブック』を制作・発行します。今号の表面では、モデル事業に取り組む3地域の進捗状況を、裏面では被災地の復興・再生へのESD関係者の取り組みを、生物多様性の視点から紹介していきます。

世界の生物多様性を学べる動物園に.....動物園の可能性を探るワークショップ実施

10月16日、動物園を訪れる人々が、どのように動物を見ているかを考察するための「Watching Zoo Watchers」というワークショップを行いました。参加メンバーは、四国地域でESDや生物多様性、国際理解等の学びを展開する中間支援組織のスタッフとリーダー的教員、そして園DEピース。ここでの発見は、それぞれの動物と人の距離でした。

白クマのピースはとべ動物園で一番人気のため、生まれてから今までの成長ぶ



写真提供:愛媛県立とべ動物園

りも写真展示で丁寧に紹介されており、名前を知らない人はいません。ゾウも「媛ちゃん」「砥夢くん」と親しみを込めて名前と呼ばれていました。ところが、カバは「カ

バ」、サイは「サイ」。さて、これらの違い、動物と人の距離は何だろうか?ということ、翌日は、動物園でどのような人々がどのように動物を見ていたかの情報共有を行いました。

生態の展示方法を工夫してはどうか、飼育員に動物の特徴を教えてもらってはどうか、といった意見交換とともに「動物園×生物多様性」の学びの可能性が広がりました。今回は、ネイチャーゲームの手法も取り入れていく予定です。

地域とともに獣害を考える.....岡崎市新香山中学校の取り組み

新香山中学校では、総合的な学習の時間を中心に、イノシシなどの大型ほ乳類とどう共生するかを考える授業を1年生で行っています。先日、そのまとめの授業が行われ、クラスごとに多様な授業が展開されました。

1組では地域で起きている「獣害問題」に迫るため、聞き取り調査をグループごとに行い、その結果を発表しました。「イノシシは命がけで食料を求めていること」や「繰り返される被害によって、住民が獣たちを恨んでいること」などが分かりました。3組では市内でイノシシを駆除してい



る猟師さんを教室に招いて、生徒の疑問に答える形で話をしてもらいました。生徒は「温暖化によってイノシシの出産が年2回の場合があること」「越冬する幼体が増えたこと」などの事実を知り、個体数の急上昇によって生態系のバランスが崩れ、獣害も起きていることを理解しました。4組

では、人間と動物の立場に立って困っていることを出し合う活動を行いました。それぞれの立場での思いが整理されていく中で、イノシシを生態系の一部ととらえてその価値を重視する視点と、害獣ととらえて駆除し、資源として考える視点が浮き彫りになりました。

最後にはいずれのクラスでも、この地域でイノシシと共生していくためにはどうしていくべきか、一人一人が真剣に考えました。来年度は更に一歩踏み込んで、地域の人たちと共に考え、行動していくことを目指しています。

都市農山漁村交流で棚田の再生へ.....高島平総研×二子棚田保存会の連携

10月27日、高島平総研の代表が安房鴨川の二子棚田を訪れ、太海の海と棚田を見学しました。二子棚田保存会の事務局3名（いずれも都市からの移住者）がていねいに案内・説明してくれ、両団体が今後棚田の保存のために連携していくことを確認しました。

外房に位置する鴨川市は漁業や観光で成り立ってきましたが、この40年で人口が7000人減少（現在35,000人）するなど著しく過疎化が進んでいます。



それを象徴するのが二子棚田。地元の農家は2軒だけで、高齢化し後継者がいません。二子棚田保存会が立ち上がり、毎年35名のオーナーを募集して耕作を続

け棚田を維持しています。

一方、高島平は47年前に団地が開発され現在5700戸・119000人が住んでいます。家が狭いこと、周辺に仕事がないことなどが原因で、子どもたちは成人すると皆外に出て行ってしまいます。

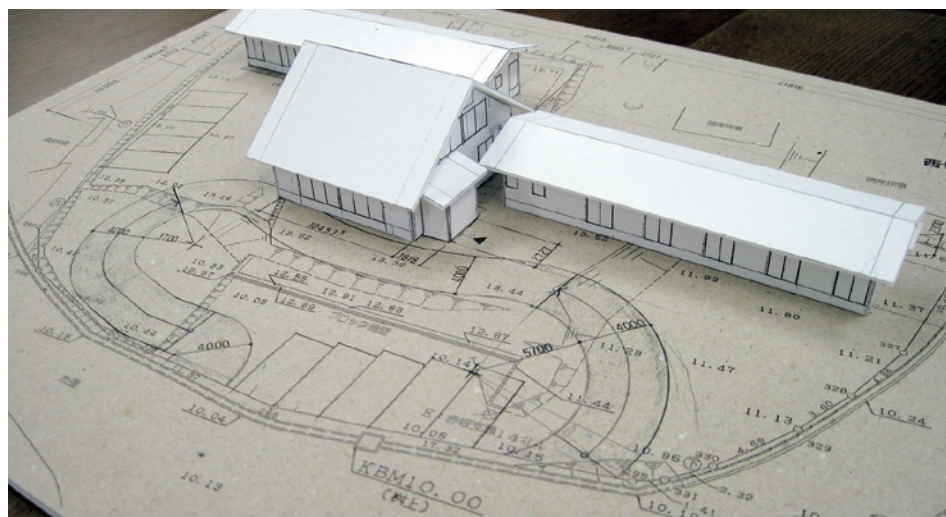
高島平総研は、シニアのニーズを取り上げ、健康づくり、居場所づくり、生きがいづくりといったコミュニティビジネスに力を入れています。都市農山漁村交流がどう役に立つか、これからの展開が楽しみです。

手のひらに太陽の家プロジェクト

～地域の生態系を活かしてエネルギーも産業も地域で循環していくエコタウンを～

日本の森バイオマスネットワーク 佐々木豊志さん

岩 手県に生まれ、学生の頃から野外教育や環境教育に積極的に携わってきた佐々木豊志さん。宮城県の栗駒高原に私費を投じて設立したくりこま自然学校が、3年前の岩手内陸部地震で被災しました。その際各方面からの支援を受けた佐々木さんは「今度どこかで何かがあったときには自分にできる範囲でできることをしなければ」という思いを強く胸に抱きました。その思いが、今回の東日本大震災からの復興に持続可能な新しいモデルを提案する“手のひらに太陽の家”プロジェクトへとつながります。このプロジェクトに関して、佐々木さんにお話をうかがいました。



ー3月11日の震災直後のことを聞かせてください。

電気が灯油もなくて凍えている状況だと聞いて、「じゃあ電気も灯油もいらないペレットストーブを設置しよう」と、自然学校の仲間たちと各避難所を走り回りました。そうして避難所の現状を見ながら、みなさんがいずれ移り住むことになる仮設住宅について考え、その問題点が見えてきたんです。

ー仮設住宅の問題点というところ。

まず従来の仮設住宅は結露がひどい、寒さ対応が十分じゃないなど住環境の問題が挙げられます。それと、数や場所に合わせて抽選でばらばらに入居が決まることでコミュニティが維持できなくなってしまう問題。環境面であれば、輸入資材を利用して地球環境への配慮がなされていないし、利用が終了す

る2年後には廃棄という問題も待っています。何よりも、東北には森林資源がたくさんあるのに建設が大手業者中心に進められてしまって地元経済への貢献がほとんどないということ。住宅だけでできて、地域に経済が生まれなければ本当の復興にはなりません。

ーそして“手のひらに太陽の家”プロジェクトにつながっていくわけですね。

2009年に、「国産材の活用促進による持続可能な地域社会の実現」というミッションに賛同してくださる人々と日本の森バイオマスネットワークを立ち上げました。そのネットワークで何ができるかみんなでアイデアを出し合いながら、地元の森林材を活用した住環境を提供しコミュニティの機能を維持したまま入居できる“手のひらに太陽の家”の実現に向けて動きはじめました。大手企業ではなく、地域の自然学校・木材会社・工務店・製材所の人たちが普段からの信頼関係をベースにしたネットワークを活かして、細かく素早くプロジェクトを進めています。いよいよ第1棟目の土地造成が、2012年3月の竣工を目指して宮城県の登米市で始まります。12月1日に地鎮祭を執り行うことが決まりました。

ーオープン後の“手のひらに太陽の家”について教えてください。

震災遺児や母子家庭、高齢者などの社会的弱者に優先的に入居いただき、被災者同士が助け合いながら安心して暮らせる場を提供していきたいと考えています。

国内有数のアウトドア製品メーカー株式会社モンベルさんからの支援を始めとして、100%民間ベースのプロジェクトです。入居者に対する長期的な支援を行っていくためには引き続き幅広い皆様からのご支援が必要です。

豊かな森林資源を住宅材とするだけでなく、二酸化炭素を増加させない木質バイオマスエネルギーとして活用していくことまでつながれば、そのエネルギープラントで雇用も生まれます。地域の生態系を活かして、エネルギーも産業も地域で循環していくような「エコタウン」をつくって、東北発の新しい復興のモデルとしていきたい。今後、津波に遭った各地で高台移転の話が進むかと思いますが、南三陸町の歌津で高台に集団移転する新しい町は、“手のひらに太陽の家”をモデルにした「エコタウン」にしようという案も動きはじめています。

取材報告：中川哲雄



避難所に設置されたペレットストーブ



手のひらに
太陽の家
プロジェクト